



俳

諧

職

業

書

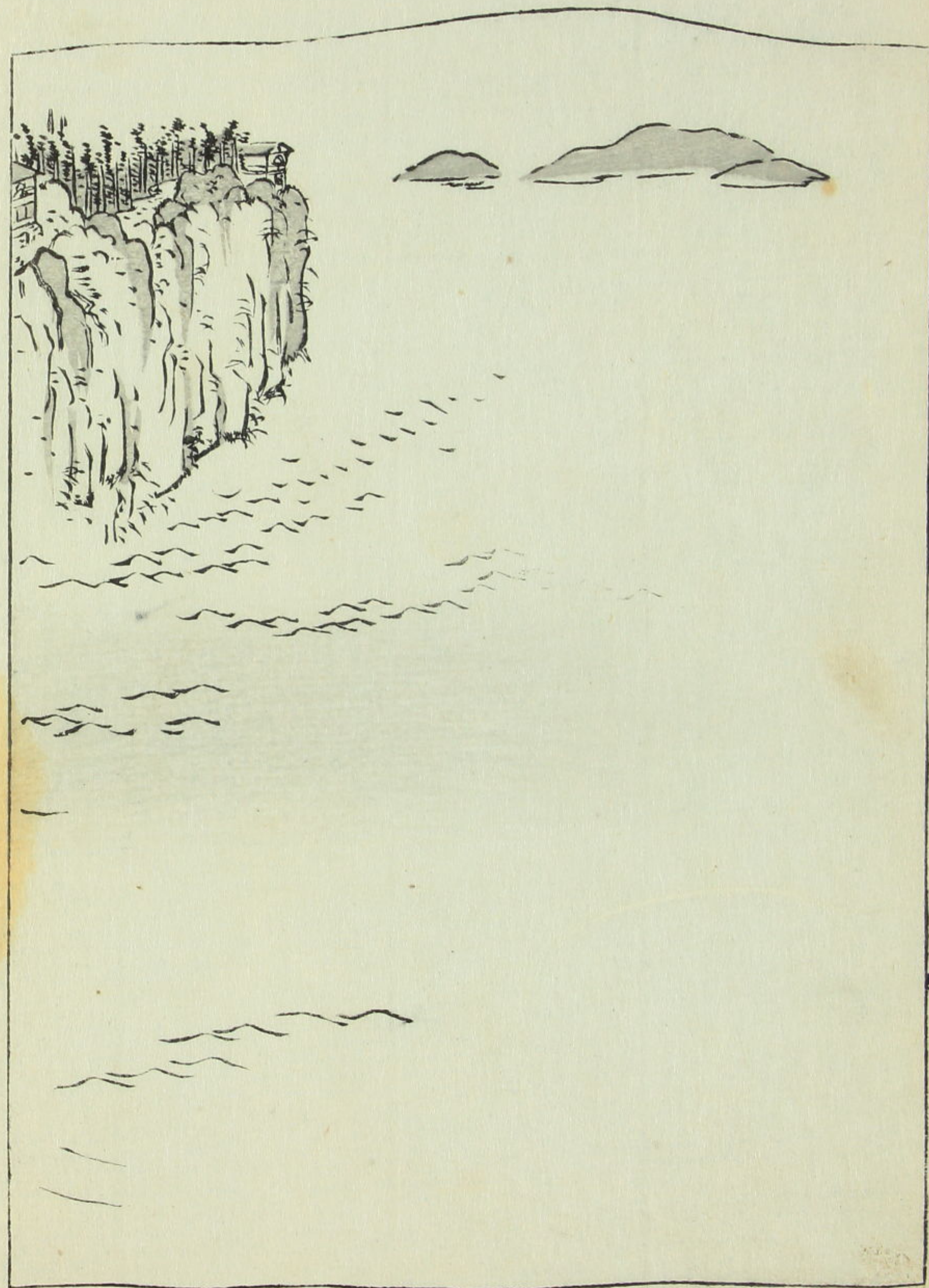
坤

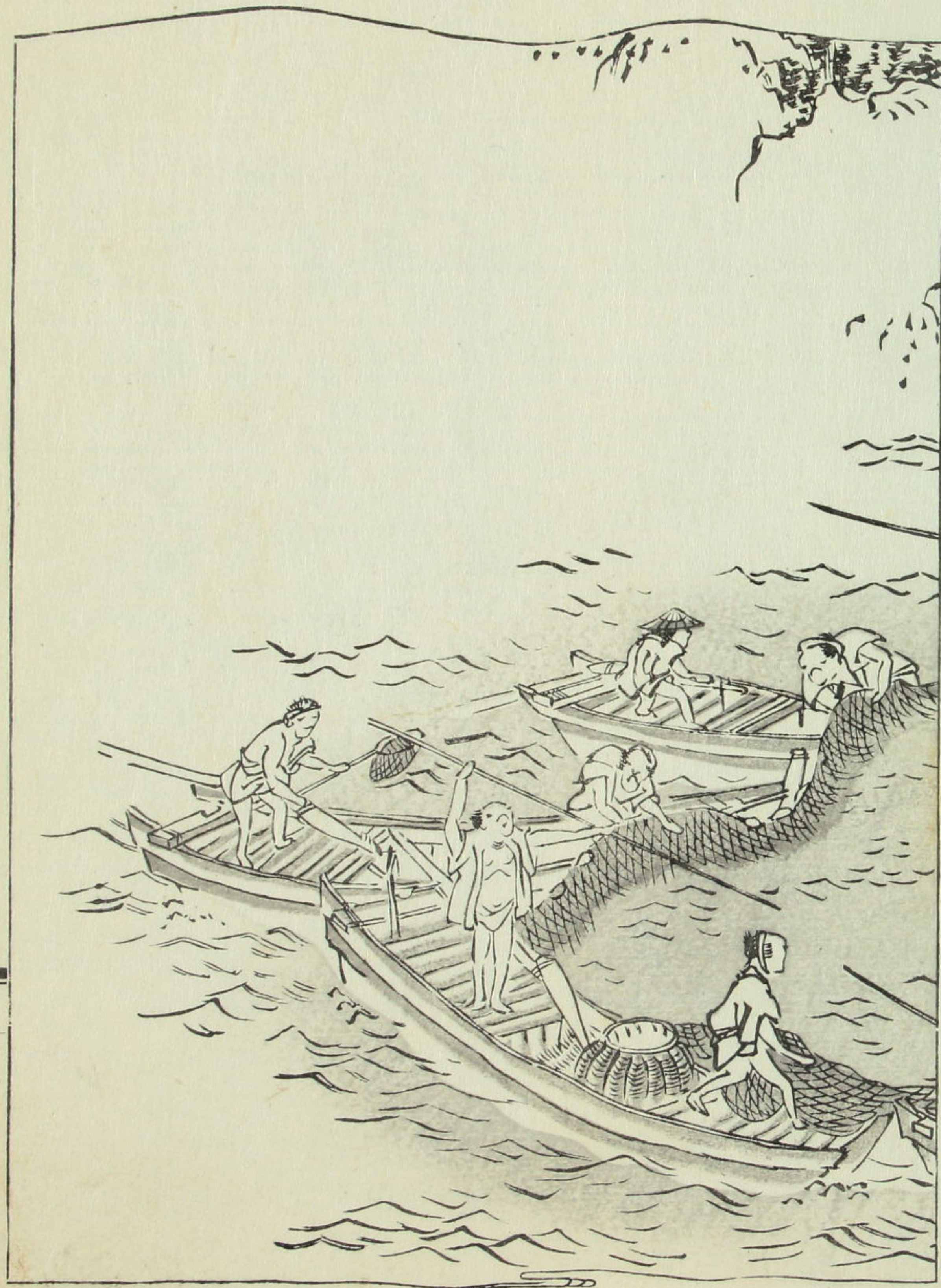


秋

の

部





鰯網曳

巨別真鶴ヶ岬尻掛と云所シラシ漁夫七八十人魚屋
を造り集り居る何時に不限昂時より出る
仕度シラシ待居るなり十二三町手前より岩
端シラシ櫓十二三不建争そむくのほり魚の来ぶ
成具付次第櫓よりやまらへ知るる小目シラシ
内に尻掛へより其時尻掛より舟七八艘
を出し大綱を打出て岩岸に寄り張込
蓋々シラシ綱の来し時より綱曳あけて取る
且シラシ忽数万を一層おとるなり
やまら一軒ふ二三人をらめつて魚見居る七八

艘の舟ハ一艘に三人つものりて出つ綱曳大さ或百
間余あり

此魚素時を何所迄も岩根子付巡りて離シラシき事
まらみち一度に多くかきとる時大生シラシ魚
圍シラシいて蓋々出て江戸へ送るなり
漁夫紀州より来るなりい成り急れあること
ならん綱の元をさる人常々多人数を抱え
おそ大綱舟具櫓其外種々の入用大方おそ
ゆる事あり近在の大商人兩三人組合り是を
分けあつとせり大漁の時一綱の魚の價
千金にも及ぶ事あり

此漁明和天明の頃より初より

箱取まは中に 笛成
聲あり 鯛ゆら

十九番

大 初 時

思ふ妻不陰や	那うつら	嬉し江何	紫地や	籠の考
今秋の秋	女雀の	あはれ	おせ	くし
	影や	今秋の秋	き	の秋
	はな			
菊	茶	蒼	閑	嘉
三	静	凡	月	梅

江の光とらるる来り秋の秋 蒼圀
 今海に流るる水も秋の秋 乳慶
 朝の露も秋の秋も 里かの
 ちの露も秋の秋も 成美
 初秋もとて 樹の中 松什
 秋の来りも秋の来りも 入江 素心
 照中の秋も 茶の来りも 茶静
 手降るも 又は 秋立 樹 葛三

秋の来りも 又は 思ひ 平橋
 秋の来りも 又は 思ひ 西里

秋の来りも 又は 思ひ

秋の来りも 又は 思ひ 秋の風 岱年
 秋の来りも 又は 思ひ 秋の風 葛三
 秋の来りも 又は 思ひ 秋の風 素心
 秋の来りも 又は 思ひ 秋の風 茶静

秋風をくわくおのりき路
 人よのいほく吹か秋のそと
 日秋の雨も添ふあきの風
 秋風を芦のを折るる外ら
 秋風に芥のつる核の如
 ちるあきの雀あきの河原の風
 蜂もや鶴も好切の多れは
 秋風を拙くもる鳥の羽
 葛之
 成美
 露泉
 蕉雨
 岸居
 川峨
 梅令
 笛成

秋風の下に寐るる漁村の風
 止しよも心付る秋の風
 秋の露も庭の所も旅の音
 標亭
 八采
 左舟



鳴突

下総の園萩原^{ヲキハラ}遠原中ハ鴨のあり居了^{ウカ}動^{ウカ}くす
何るを七八間^{ヘタテ}隔^{サテ}々竿羅^{サテ}を鴨の正面に向き^{フカ}け
を付るがら^{フカ}くもりく^{フカ}と回り^{フカ}家初ハ大輪^{フカ}く
回り^{フカ}隔^{フカ}々^{フカ}近^{フカ}寄^{フカ}ま^{フカ}小^{フカ}輪^{フカ}に巡^{フカ}り^{フカ}止^{フカ}く^{フカ}六七尺
丹^{フカ}胃^{フカ}近^{フカ}く^{フカ}成^{フカ}て^{フカ}かの竿^{フカ}羅^{フカ}を^{フカ}投^{フカ}け^{フカ}く^{フカ}とる^{フカ}水^{フカ}
六七尺の所^{フカ}成^{フカ}た^{フカ}る^{フカ}ふ^{フカ}あ^{フカ}や^{フカ}あ^{フカ}の^{フカ}羅^{フカ}を^{フカ}か^{フカ}
らせ^{フカ}る^{フカ}手^{フカ}練^{フカ}の^{フカ}さ^{フカ}び^{フカ}なり^{フカ}
鴨の志^{フカ}ら^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}眠^{フカ}る^{フカ}こと^{フカ}く^{フカ}居^{フカ}る^{フカ}是^{フカ}を^{フカ}鴨^{フカ}の^{フカ}看^{フカ}
経^{フカ}と^{フカ}り^{フカ}る^{フカ}なり^{フカ}
山^{フカ}城^{フカ}の^{フカ}身^{フカ}羽^{フカ}遠^{フカ}く^{フカ}と^{フカ}聞^{フカ}り^{フカ}

廿番

天魂糸

近^{フカ}火^{フカ}子^{フカ}持^{フカ}た^{フカ}ぬ^{フカ}静^{フカ}小^{フカ}廿^{フカ}り^{フカ}見^{フカ}
娘^{フカ}の^{フカ}成^{フカ}算^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}天^{フカ}魂^{フカ}糸^{フカ}を^{フカ}
三^{フカ}息^{フカ}棚^{フカ}の^{フカ}世^{フカ}遠^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}ら^{フカ}わ^{フカ}る^{フカ}か
染^{フカ}る^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}し^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}は^{フカ}ま^{フカ}る^{フカ}血^{フカ}供^{フカ}が
生^{フカ}る^{フカ}あ^{フカ}ら^{フカ}し^{フカ}く^{フカ}て^{フカ}は^{フカ}ま^{フカ}る^{フカ}血^{フカ}供^{フカ}が
形^{フカ}の^{フカ}か^{フカ}子^{フカ}が
深^{フカ}曉
作^{フカ}者^{フカ}を
山^{フカ}骨
近^{フカ}流
梅^{フカ}令

糸織り子 誂きさう 魂のひき
 魂柄の 誂りさう かにし
 上さう 白のあましく 魂祭 茶静
 生薑の 物さう 物さう 物さう 酒大
 魂柄の 葉肉さう 竹鞋 茶静
 傾城や 扇の上さう 魂祭 梅令
 傾城の 扇の上さう 魂祭 酒一
 傾城の 扇の上さう 魂祭 茶子

傾城の 扇の上さう 魂祭 酒一

右 丁申

糸織り子 誂きさう 魂のひき
 魂柄の 誂りさう かにし
 上さう 白のあましく 魂祭 茶静
 生薑の 物さう 物さう 物さう 酒大
 魂柄の 葉肉さう 竹鞋 茶静
 傾城や 扇の上さう 魂祭 梅令
 傾城の 扇の上さう 魂祭 酒一
 傾城の 扇の上さう 魂祭 茶子

茶の下を遊ばし侍る畫の露
珠ふるくくくくあふふる
一茶

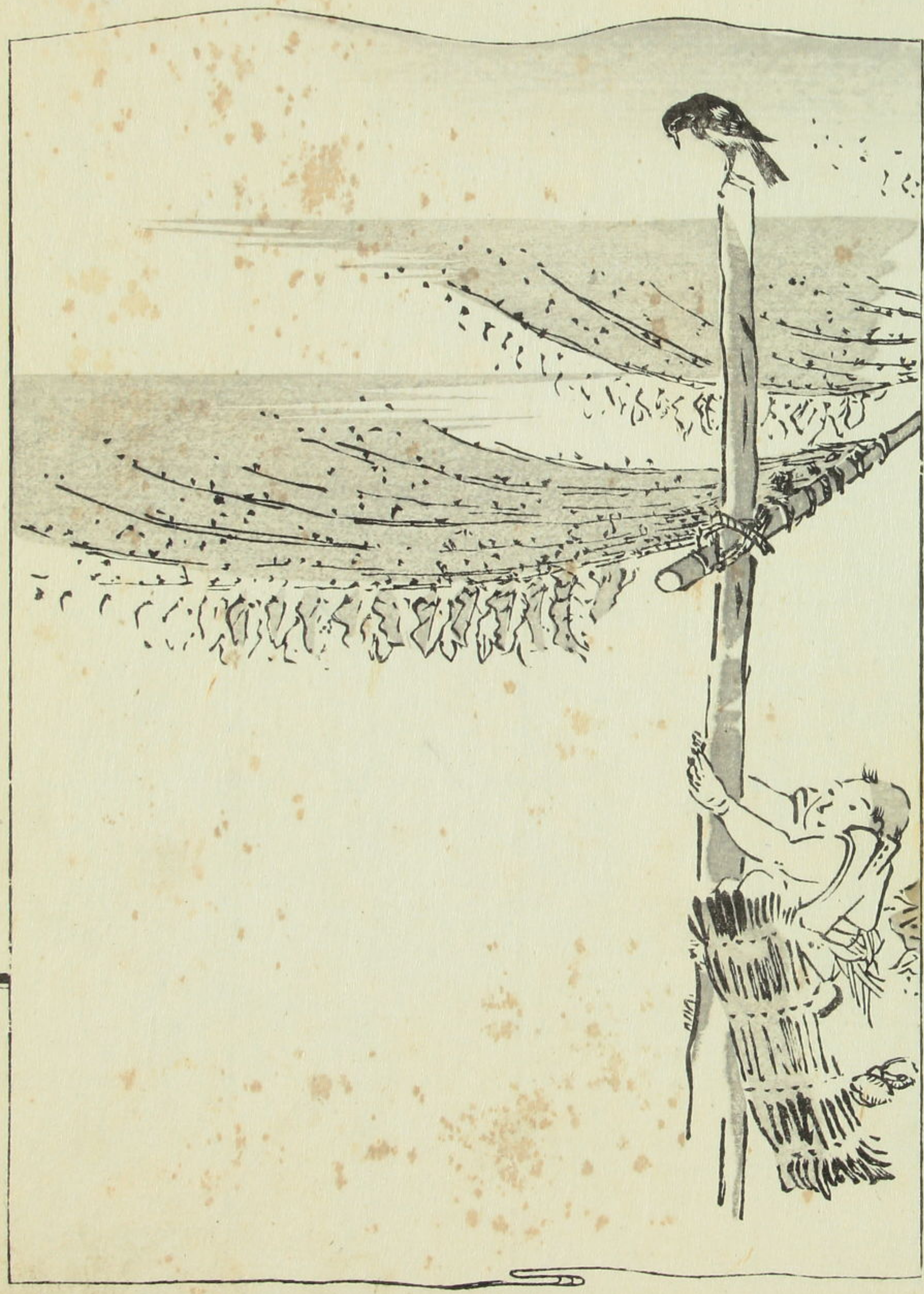
あふふるくくくくあふふる
光のさけ露のけりあの中
風朗

乙二村よあふる時

あふふるくくくくあふふる
月さのあふるくくくくあふふる
道彦

あふふるくくくくあふふる
あふふるくくくくあふふる
卓池

浅美



煙草作

上州甘楽郡 館村より出るを館の奉場といふ
此辺十里四方より作り出さるるを総名館といふ
ふらふらあり

春の彼岸頃に種を蒔き苗床拵方凡茄子苗の
床と同し

貝割の厚丈二三寸ふわりて畑へ移し植る
此貝割の頃より切蛆とて黒き虫土中に居て
根を喰切事あり其時其跡く代り根
植足すといふ

古集小 切蛆の喰たよりある植煙草

あやしめる酒の糟カスホシカを鱒を用也

葉をかき土用あけたり盆後迄をまじらるる
上の葉を天葉といふ其下は天葉下といふ其
下を中葉其下は中葉下その下は土葉上それ
下は土葉といふ名あり 葉は揉み土間
多し其葉をとりて盆事二夜ぬきおたは
福をもちといふ

古集小 秋風や二番煙草の福をもち

そをとり 繩ハハをハサ挟み干け其仕様圓の如く
凡抗を二階程つ、間を多し建てる拵なり
是より繩三四十筋ほど引張掛るなり雨天の

時ハ繩を十丈に程づ、押寄て口をふりまき
凡天等十日ほとも干又地乾とて土間ふならべ
二日ほとも干すなり
又夫より家の中に鉤置て農業の暇雨の日
或ハ夜まづに家内打あて葉をのまき
種を採りて一反の中五六本生立を其ま
まきとるなり此種熱細末なるものあり
同園沼田畑等と移り一類あり利根郡沼田の
城下南在一帯に本場といふ種類館と異な
り莖太く葉形大きく一尺七八寸中みち或尺あま
なるも何り最良とて色美事なり

干しうハ飯の場不と遠む方抗を二本
まきばよりよ煙草を換へ繩を引張
てシコロ干ふかきなり高さは丈七八尺もあり
又家の外廻り庭下へ繩ふたを五六尺
あまほりて干し何り繩の長さ取扱なり
便利なる根みき丈とらわたり
此烟草の一能を濡きよて捨るとくとも火の
付るす妙なりゆゑ東海り濱方漁師ハ多く
是を香料ふまきとるなり
又此申る田家あま田植煙叶と稱す
梅雨中专用

又湯粗ふ多く吞ても口中の何さるる事
 秩又烟草と稱すハ武員秩又郡小麥村と云
 解を本場と云一郡抑一なる秩又煙草と
 味ハ館タテより一等強ツヨクく自むのうる大し
 事他ルハ軽ルなる

廿一巻

大 茶

お揉場やり此より一茶
 押きつて之を角力の近玉舟 徐全
 角力足子天立をてり受て 日人
 お揉場より角力なる角力 茶芽
 取おすに只此よりお揉水 茶静

勝角力人ノ押上ル候事

西馬

五

痛子也此等ノ事ハ

蟻兄

痛子ノ心花ノ事ハ

菊三

見人ノ心ハ

吳亮

遠方ノ事ハ

抱儀

秋ノ夜ハ

丁知

和女ノ心ハ

茶静



轉取

武州の西上は遠より轉ツギを取より多く一ツギは
獲ツギと云物より獲ツギ其取法は狭の餅ツギ母
生ツギと云物を馬の尾より轉ツギき置りし物と云
動ツギく申るに如くなりと獲ツギ風より獲ツギき
りけと云捕らぬと獲ツギ空高く飛えり
地より獲ツギ飛申るなり

廿二番

丸 砧

打多しや砧の音も多し前	茶静
燕様めし取回し砧の如	碩布
急のしきも探るは遠より砧が	成美
衣掛しきは回者も鼻りれ	稲州
隣より人をやめし止砧	素志
海より又も通しを衣掛	雲潭
一解より多しを取の澄砧が	不知 <small>作者</small>
神遊も多し申るは小夜砧	梅令

下りあはれは知るぬ禁の礎が
笑はる
遠くへの程のゆるる礎が
あんな

右 雁

早鳥の競るも雁はしる
九果
初雁の山田見は海邊し騒が
鳳朗
そり合はたも程のゆるる
あんな
初雁も嬉しき聲を掛く
由誓

大も道ありしるぬ渡雁

鳳朗

鳳朗老所四圍引枝の御座ふ

鮫洲まゝ迎ふ行々

おしるも大羽をむや渡雁
茶静
暮れ雁我らに落接も
標堂
雁鳴るもたしるも新う水
茶山
あんなのむ雁もあんな
一茶
来梅も雁もあんな
梅令



尾越小糸細曳

下野足尾峠あり身ハイカツキヒヨリカケ鵞鴨判りあり
 中ふも鶺鴒多し早朝廿三二百羽夕日廿三
 十羽をらゐつ、安く取らるるに廿中に
 飼ふにてもあり喧身より浅くありと云り

廿二番

左まゝりり

舞人の心も世もさかしまし〜安 真高

其杖村や燈籠の中にまゝりり 一茶
 鳴るは心なるは淋しき 士朗
 笛まじり〜 燈の女お茶屋に 茶静
 待鶴を逢〜 工室に 穂 竹烟
 鳴止〜 おきりしも ちあま 卓池

丸 けりり

急ふ名か思はせぬ名流身 雲白



又ささるぬ竹は路に渡り
 行へしく河魚ふりき渡り
 降れ土に空の女は渡り
 後をたぐひて心もたれ渡り
 渡りゆく渡り又はぬ小鳥の
 籠年

鳥夢
 茶静
 作者
 不知
 未詳

白作

礎スル白ス竹タカ輪カを上白クハツ下白クハツキラメクケ
其備の中へ松ノ木ヲ大割と折込造る所に造る所に
小割を打込造り多く大寸径二尺位第一寸
丈夫少く多く挽く子比シる物ハ一生白成
千俵挽クハ一日
礎スル白スに櫛の丸木を以作るあり大寸キ寸長寸其
寸位三四十年以前まは是の以テ白の西
脇ク繩を付一人を挽み白の以テハ一日
小西足ま踏張おきて左右の手を引くて
繩を持たぶちがいふ挽用の業りハ今ハ

大ク止まり

又尺二三寸まらめの方ハ小く目の立方ハ變カ
を引く所に碓を廻して流して中へ是木田の
粘チ土を後天く粘子を多く所を握の堅木板を
打込め目を多く此土を粘み解バ水の中へ
苦境を二割に分けて一は一日に挽く事を
後保る事ハ一日
水戸の上町ハ礎スル白ス其某と是のハ職人等リ
備前の國人家上手等ハ一日白を二百石
挽く目の缺カクる事ハ
他國の白を五十石挽く目減を用に

まきび

招のま木のスルス礎白の方を上品フヤの茶フヤ

出スナナてくスナナつるスナナすスナナりスナナ

徳子リッナ埴の軽確の方を下品子リッナの茶子リッナの軽子リッナる子リッナ

ぬる事多子リッナく子リッナ聞子リッナり子リッナ

廿四番

左 却 采

何れも思ふおも二日月 大 奪

初月をもぬも松ものも歌ものも 葛ものも

壺ものも水も流もるも初も月も初も 卧も息も

待も月ものも字ものも海ものも旅ものも 乙も二も

田も曾ものも字ものも海ものも旅ものも 生も高も

初も月ものも字ものも海ものも旅ものも 吳も老も

海ものも初も月ものも字ものも海ものも 卓も池も

月も初も月ものも字ものも海ものも 士も朗も

月も初も月ものも字ものも海ものも 葛ものも

橋立の渡り 出雲の舟 芋堀の土 多岐の川 苗を植る 陰の光 数多の 朝平	渡り 舟 土 川 月 光 月 月	袖摺 同 夜 知 結 里 月 月	宇備 尚 善 風 茶 成 臥 左
---	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------

月心人の道は歩むを 月意

右 名月

名月 名月 名月 名月 名月	花 の 今 や 月	花 花 花 花 花	浅 梅 全 馬 茶
----------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

名もや火を焚付る中河原一具
 名もや聖山を持て捨人葛三
 明もや家路違ひ草付山全
 明もや小もやに浅め山の奥又二
 何所もやもやもやにあやうか沙路
 道もやもや身もやもや月もやもや菊堂
 一もやもや何もやもやの月もやもや葛三
 一もやもや葛三のあやうか月もやもや漢豊

月一程もや何もやもや見もや何もや由哲
 月もや何もや何もやもや走もや何もや巴井
 海もや何もや何もやもや走もや何もや石路
 限もや何もや何もやもや走もや何もや雄洞
 かもや何もや何もや何もや何もや何もや卓池



野馬取

下穂小金の牧^{ニキ}の内高野内野柳澤など
野より春秋両度有り此外おの遠小五ヶ所
あり一場所乃廣き大小ありあきく 縦三里横
五里も何らん前も後より 命ありて馬の十
りも前より追まにかり三四日ありハ歩人五六
百人又ハ中には廣き野あり七八百人も出堤の上
一丁程の間に四五人ハ立居て馬を掛原中よりハ
牧士七八十人勢子三百人程の野馬取追立候に
狭き所は方解幅二里の境へ馬を何ヶ所となく
切きとをあらく是れ方へ追まると初日より三里



四方の野へ業を二日めより二里を野へ追入を三日
より一里の野へ集る前日ハ二十箇四方のりより
嶋へ一ツ追込るなり南北の野のり南の方より
牧士駒子の者立ならむ北の方へ追込る中ハ野を
のりあきハなぐる駒子ハ遠方より追込る
引込る馬数足あり是を追廻し追込るハ林
あり山川芦原沼あり凸凹ある所を野馬ハ今際
りに逃走るそれを追駈逐つ駒子の者を馬の
いら首にいづき付追寝るを馬を引おき逃ん
中に牧士も乗馬ふのり走り付飛り捕ん
ととと又ハ追るなり野馬の脊ハ飛移るなり

其のり野を三日自存ハ駈馳る度ハ馬
を裸馬ハ志が付まことがるのり
のり廻りよるりある所を解押く決りぬ
出のりハ戦場ハかきもあらんやと眼を
しきむをり其は途に二十間四方も堤を
築立ハかき嶋へ追込る馬の数凡三四百も
何んハ野をり追込る場の上ハ機を解
役所より地頭所より出役ありは牧士の
役帳面を控へ書留る其堤の下をみ
場の中よりハ牧士三人程野袴より出馬取を
十人ほど居る馬溜りより一足是より目掛け

多るは追出を人牝牡母子三四匹付流し都合
 五匹よりあつた右の役所此下へ来る所中
 小御用母たるは一足を七八人かり追伏す
 口は業業響をけ首あり尾へ太縄をあけし
 引出すかり馬をまはさす御に御むらひハ
 いくなる夏ウキめやありんとオホキ騎十三ダき候を浮め
 かき毛躰ウキのまはさすなり曳出は廿十町程
 といハ馬一匹に十二三人よりやうくヒ母ヒ牽く夫
 よりハ終ウキ三四人より酒シエ井の驛シエ牧士の屋敷
 まで引連送る馬も大々ヒ女ヒまといかなる
 ちやんと物思ふ躰ありヒ二十丁ヒりヒまする

内井合点ヒまはさん三四人より追まは
 己ヒと急ヒて歩行と
 御用馬ハ三才なり回ヒ三才ありヒ未ヒくるき
 を腰のあしヒ内野まは内野ヒ候ヒをヒ燒ヒす
 をま急ヒて放すヒ四五才あり御用なるヒ
 有り是を一両年野より追もヒ一ヒれヒ
 一足目をけあるを押しヒ外ヒの五才足ヒが野ヒ鹿
 小なる由急野口の木戸をヒ追出まはり
 子ハ四五足飛立ちヒ一ヒぐヒをヒ鹿ヒ一ヒさヒ入り
 走り逃れぬ御野の画に野馬の躰ヒをヒ寫ヒ
 一奔る所正に園のぬヒおヒつヒもの野ヒ

行くそよこゝ母を尋ねても更にも見え
さる由急にかたきつる跡ありしうあつをいり
牝牡とも野へ返されしを見え再々後さるる
りうきりり

牧す馬を見分て何支と大衆にさげ
とれ掛おの御役人懐か記し凡三百の中六七
十足取れ再調の上御用馬何匹御地頭所へ
何匹と差出れ残り何十足程ハ御拂ふ出る
り直御さるる善く御買ひ来る
馬に至るをさるる物さし申に事の有
いし申さるる事にもあつおさるるやうさるる

三百足を三所^{ハダテ}母境を隔て百匹つ一所
まに馳合ふさるる更にさるる

此野馬取具物を由し給ふ近存より
男女^{オヒタシ}夥く出れ群集し諸商人も出れ
ふまれ小家を造り軒を造り出れ
物の入り高をさるる管物さるる何れも
用の并さるるやうに持出る如き

廿五番

花 秋

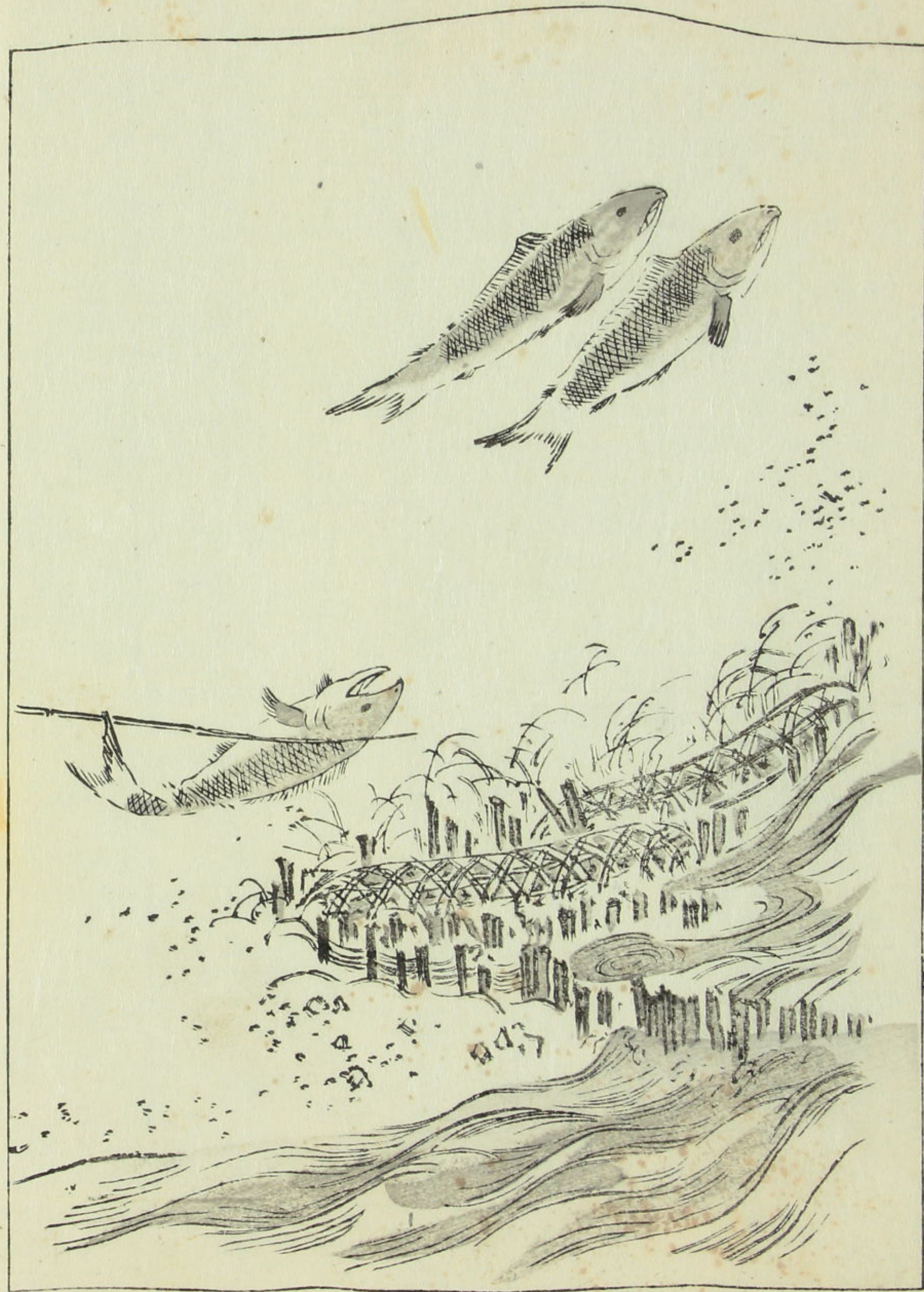
今嘆く静ふも持常く柳	喜駿
是道しつ又付くも静の徒	眉山
戦く皆に花の逐付く小秋如	西月
あやれ静を見し心まの静の心	素志
嘆りり静かたりる静は花	静雪

庭掃やいりり秋母かりし	秋景
鈴繩の端も心知りて静の心	閑月
はるれ心嘆けし静静なり	道年
静もほろり静あり静の心	茶静
然れれちりり静の心	成美
絨燭も行あり静の心	年緒
花静も静も静も持りし	西馬

右 鹿

鹿笛の吹く人共素累	更牛
好る相も鹿の鳴きや	台々
伸あくるやうに鳴り	素磔
好いねき	卓池
為る活る	千影

鹿笛の吹く人共素累	更牛
好る相も鹿の鳴きや	台々
伸あくるやうに鳴り	素磔
好いねき	卓池
為る活る	千影



鮭打

越後^{エチゴ}の川^{カハ}の曲角^{マカド}へ川^{カハ}を^タ走^{ハシ}り
小築^{コキキ}杭^{カキ}を^ス垂^スけ^テ打^ツて^ハ鮭^{イサナ}の^ミ水^{ミヅ}中^{ナカ}を^ヒ登^ノり
る^ルあ^ハら^ハざる^ルや^ハら^ハに^シて^ハさ^ラば^バ鮭^{イサナ}を^ヒ勢^{イキホ}ひ
み^ミ乗^ノり^テ砂^{スナ}原^{ハラ}へ^ノり^テ砂^{スナ}の^ウ上^ノ十^ト間^マあ^ハり^テ所^ト
を^シり^テ又^マ川^{カハ}へ^ノり^テ入^ノり^テ又^マ川^{カハ}へ^ノり^テ漁^{イサナ}文^{フミ}を
川^{カハ}の^ウ端^ヘに^シて^ハ積^ツり^テあ^ハり^テ其^{カゲ}陰^{カゲ}に^シ
り^テ長^{ナガ}竿^{ササ}を^テ持^ツて^ハ鮭^{イサナ}の^ミ水^{ミヅ}中^{ナカ}を^ヒ登^ノり^テ
移^{ウツ}り^テ所^トを^シり^テ鮭^{イサナ}の^ミ水^{ミヅ}中^{ナカ}を^ヒ登^ノり^テ取^ツり^テ花^{ハナ}
丸^マを^ヒ勢^{イキホ}ひ^テあ^ハり^テ走^{ハシ}る^ル事^{コト}あ^ハり^テ横^{ヨコ}に^シ
な^リて^ハ起^ツる^ル事^{コト}あ^ハり^テさ^ラば^バ鮭^{イサナ}を^ヒ勢^{イキホ}ひ^テ取^ツり^テ

廿六番

尾 幾久

結^{ムス}あ^ハり^テ垣^{カキ}を^ヒ登^ノり^テ菊^{キク}の^ミ水^{ミヅ}中^{ナカ}を^ヒ登^ノり^テ素^ソ心^{シン}
草^{クサ}を^ヒ登^ノり^テ一^{ヒト}歩^フき^テあ^ハり^テ月^{ツキ}を^ヒ登^ノり^テ水^{ミヅ}を^ヒ登^ノり^テ
物^{モノ}を^ヒ登^ノり^テあ^ハり^テ大^{オホ}菊^{キク}を^ヒ登^ノり^テ一^{ヒト}歩^フき^テあ^ハり^テ

孔雀の心よき庭のり菊の心
 法所らのめりる何れ茶花
 へはらぬ事よの嘆く垣外
 門連し心幾久入るれ白丸
 西吹や菊の心は菊の心
 きれおのめ様へ何れ茶花
 是末の書お存お長き心何れ
 作しはる茶花の心は心

翠川 圭布 多美 持世 紀遠 蝶六 野毒

嘆心く菊の花のり 九十月 茶静

右 紅葉

我高の紅葉足付 藤之知 蜀之
 見る人の唇紅くもれもり菊 浅美
 帯をよき心へ入るる紅葉が 宇橋
 下谷を松の葉をぬんるる季 泳田
 螺貝の心よき心は紅葉哉 右節

川燈の上を 行燈の 字を なす	花の 花 花 花	花の 花 花 花	花の 花 花 花	花の 花 花 花	花の 花 花 花	花の 花 花 花
花 花 花 花	花 花 花 花	花 花 花 花	花 花 花 花	花 花 花 花	花 花 花 花	花 花 花 花

花あるに下葉を話か叶ふ葉
 由哲



岩茸取

キツラゲ 木茸取も同

武州秩父山^{チチ}野品足尾峠豆州^{チチ}みづ^{チチ}澤山に
出づ

廿七番

左 せり

雲を足す出づ何とて河を渡る 茶静
夜も明く野を眺む朝の下沈む 青壺

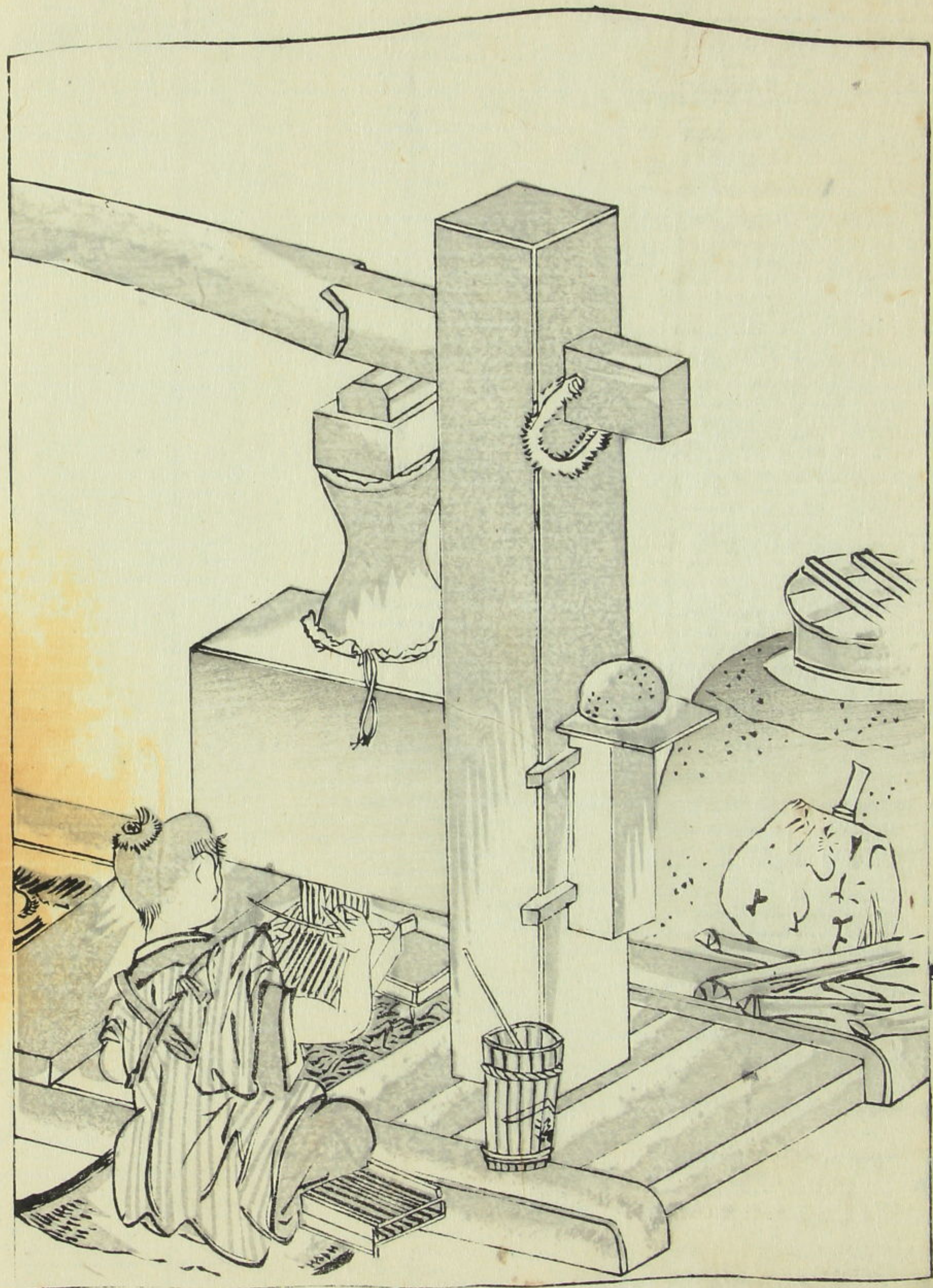
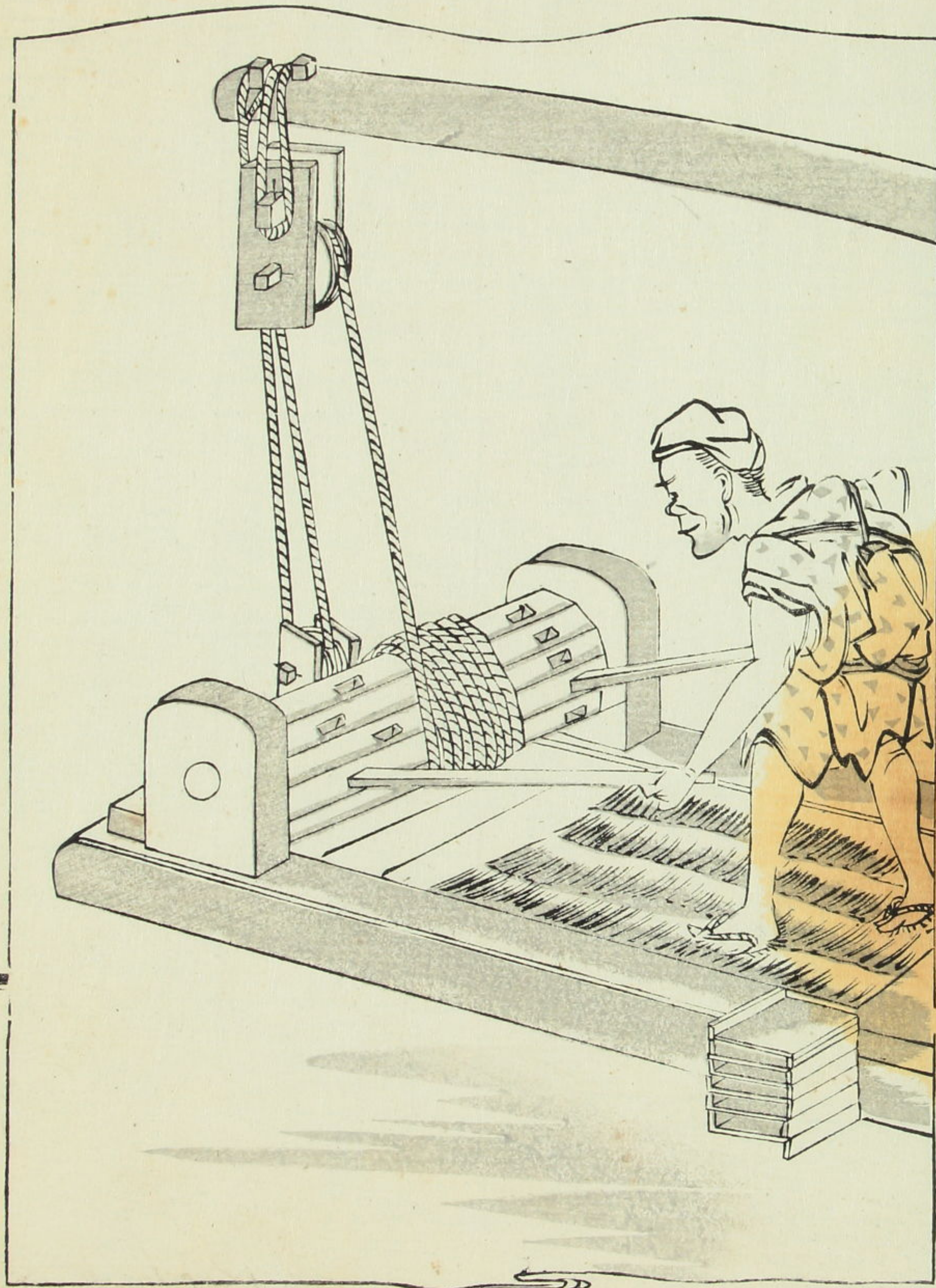
朝霧や出づほつとせなる尾 高木
大竹に日影さる雲の雲 梅令
めら〜と汐本林大の雲中 涼谷
舟渡り鐘撞きとやまに中 雪守
秋霧や暗の霧つとけり 士朗

右 秋 暮

内み〜 向來る人の跡も 茶静

秋の暮は枝枝に手綱物 全
 うの向は旅人來り秋の暮 蒼朶
 暮れ穉を解ち挿んで好の暮 一茶
 立しほ平失るををん秋の暮 未暮
 阿それれ枝に物の暮は初 道彦
 あまの暮を續しと解く程 葛三

冬 の 部



線香突

江戸めづい本所^{シヨク}にあり所^{シヨク}めりある處^{シヨク}抹^{シヨク}
香をど緒^{子リ}くみ煉^{子リ}く^{ハコ}宮の中へ入^{ハコ}き一方^{ハコ}り
重石をかくれハ宮の底^{ソコ}より線香三四十本つ
垂^{タル}るを童^{ワラビ}れ手^カ抱^カえあむや^カあ^カく^カま^カる^カに
乾^{ホシイタ}極^{イタ}く清^{イタ}く^{イタ}る^{イタ}ま^{イタ}ハ^{イタ}女^{イタ}を^{イタ}り^{イタ}あ^{イタ}り^{イタ}十三四^{イタ}女^{イタ}を
を^{イタ}ま^{イタ}ふ^{イタ}手^{イタ}を^{イタ}な^{イタ}や^{イタ}ら^{イタ}ね^{イタ}を^{イタ}手^{イタ}際^{イタ}ま^{イタ}く^{イタ}出^{イタ}来^{イタ}
ま^{イタ}く^{イタ}ぬ^{イタ}ま^{イタ}

廿八妻

九 神 笛 主

寺^{イタ}ま^{イタ}よ^{イタ}る^{イタ}飛^{イタ}い^{イタ}よ^{イタ}ら^{イタ}神^{イタ}も^{イタ}お^{イタ}ま^{イタ}る^{イタ}一^{イタ}茶^{イタ}
井^{イタ}の^{イタ}端^{イタ}も^{イタ}神^{イタ}の^{イタ}所^{イタ}ま^{イタ}る^{イタ}由^{イタ}誓^{イタ}
上^{イタ}京^{イタ}へ^{イタ}来^{イタ}た^{イタ}り^{イタ}ぬ^{イタ}り^{イタ}神^{イタ}の^{イタ}笛^{イタ}主^{イタ} 梅^{イタ}令^{イタ}
十^{イタ}月^{イタ}の^{イタ}笛^{イタ}主^{イタ}の^{イタ}名^{イタ}は^{イタ}何^{イタ}の^{イタ}神^{イタ} 露^{イタ}衣^{イタ}
麴^{イタ}屋^{イタ}の^{イタ}門^{イタ}掃^{イタ}り^{イタ}あり^{イタ}神^{イタ} 迹^{イタ} 笛^{イタ}成^{イタ}

何事毎流をく程神迎 茶静

右 十報

畑仕るをる十夜の手繰が 卓郎

箱倉より

し傘の谷ををり十報が 一具

黒髪を照りてをり十夜くれ 八采

何ゆへにをりてをり十報が 茶静

箱の舟の舟お娘を祀り十夜が 葛三

門あち家をを祀りてをり十報が 月居



狐取

越後より狐雪中に喰物を搦んとて軒近く
来りてつるを成すを瓢ヒヤゴの頭を程々切
て中へ食物を入り野中には至る食物をくら
んとて狐の首の瓢の中へ入る理ムはおおみ
多しとてゆえゆくとまきと瓢トビふぬげざれば
其中へもふを打多しとて取なり

廿九番

夜時雨

夕暮あふけぬ旅の時雨 博郎
お降いんと二足り神も此 蒼虬
時雨も小笠に降る朝の風 あつめ
うらまゝ鳩の時雨かきり 起星
鳥も眼をむく時雨か 曉河

水戸城の事二葉の事九が
 分あつた時雨おしつ
 雨の事おしつ竹のから騒
 事おしつ時雨の馬たを山
 時雨の事おしつ山の歌
 旅人より燈くらき時雨
 時雨の事おしつ時雨の事
 吹くけこ虹に押おしつ
 袁丁
 鳳調
 秋岸
 山有
 由誓
 葛三
 風外
 愚支

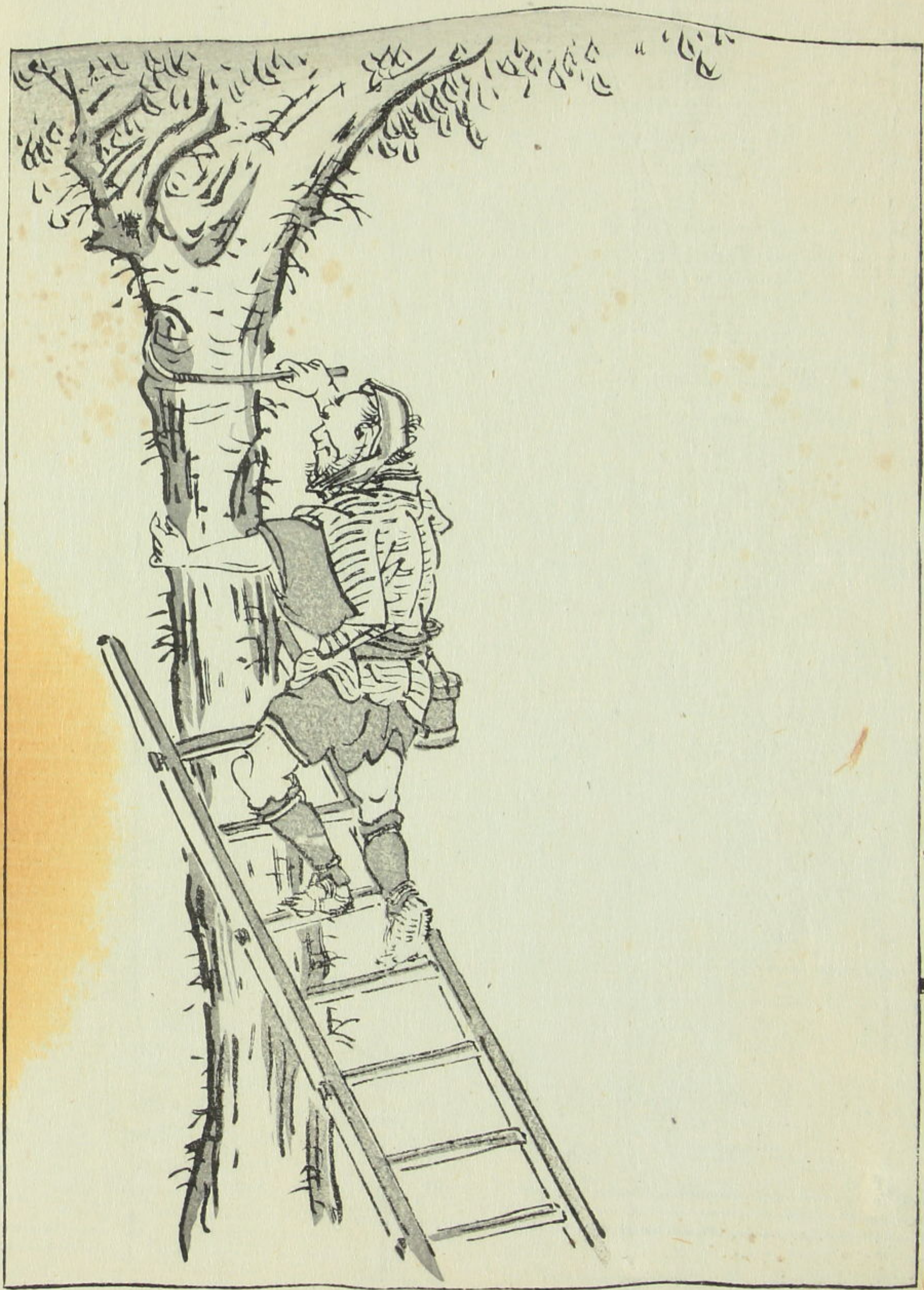
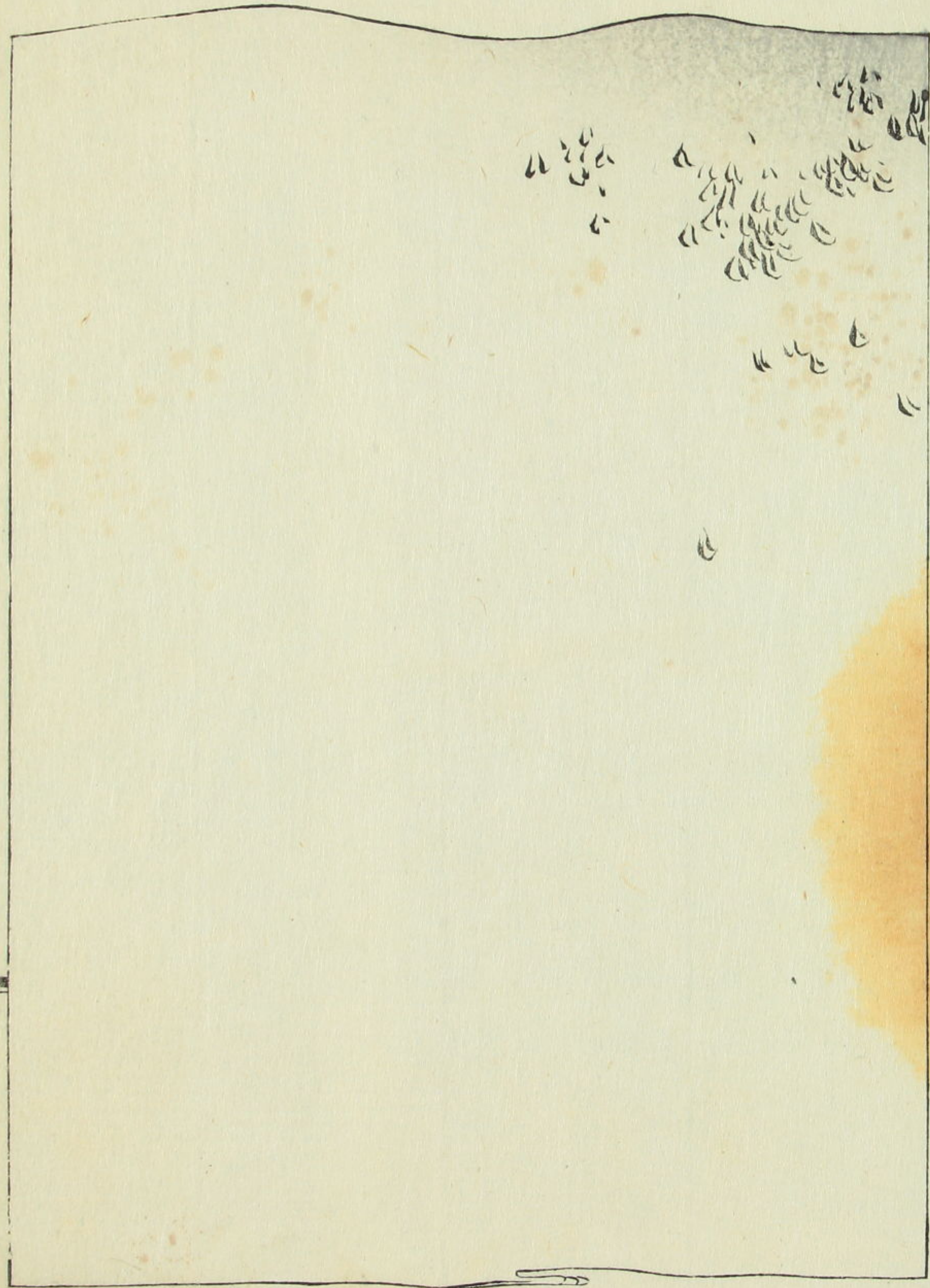
秋の事おしつ物事時雨の深ふ事
 夜時雨おしつ
 由誓言
 蕉雨

右 木 枯

光る毛平雨の朝は光る
 風おしつ
 木枯の事おしつ
 碩布
 士朗
 大梅
 澤石

風やおしほの跡を山の形 雀角
 毎るや風吹く山姥骨 茶静
 木枯の終り吹くる物も好く 月居
 吹きつゝ風の空を飛ぶ星 卓量
 風の吹く時を葉の担 秦静
 おしほを連る何事も何事も 悠々
 木枯りの木の根をぬく口を 八采
 吉かきや終るは花の揺る 梅令

木枯や宿の跡を山姥骨 杜撰
 風の吹く時を葉の担 松什
 おしほを連る何事も何事も 風お



漆掻

常陸下野丹阿り季キヨセ常には夏の部小阿我と
ハ九月より十一月まで阿り掻人ハ越前カキコに限カキコ
と阿り往來に二三十人連立ツレタチ所解へ阿りて
各別ナジメきく馴ナジメ樂の方へ行阿り
山を買仕切て漆をこもに種イロク々差別あり
事シゴ整シゴりれば阿り
但羽州モカミニ最上ヨキ充物阿りと云は産の掻人ハ
越後岩船イカフネ郡意多一徳スベ々採トリ初ハジメるは
半夏のころ候とい

世為 尾 落 葉

落葉の心氣木も物を急ぎやれ 一具
山もや落葉後よまき 阿り 一のめ
さりとて六考のまき集る落葉を 十朗
北落葉の丹也宮寺めぐる 都のぬ 月居
落葉の日向小急むし小僧也 一茶
汐先や落葉の下を潜る音 壺天
舟のふみ犬の吼はく落人哉 紀逸
あつた田屋つし林をおもひが 一具

明子時人々を待て淡葉が
小坊主を風邪ひらぬお木葉
角包を牛乳とやそ散木葉

成美
乙こ
全

右 枯野

春の風を待つも枯野が
鳴るれ鹿を〜もき枯野原
枯〜て道ふ吹れ、雨にさ

鳳朗
春雀子
梅通

焼餅のぬ〜ちうはるの〜れが
枯野あらえ〜る今ぬ〜る
鯨の皮ふ〜れ。春の枯野が
旅人ふ吹売世ふ枯野〜れ
行くまに高〜に梅がれが
晩鐘お〜る。枯野原
枯野来た身のお〜る。高屋哉
稲妻の〜も〜る。枯野が

葛三
壯賢
舎徹
梅令
南嶺
了々め
茶静
淡史



兔取

出羽ゆき兔を取るに雪中山の上より兔を
追りけり籬タカ投下けり其籬タカ兔より先へ
下る我見ゆもをや叶いぬ予と雪中へ頭成
つきあひ尻尾を出して隠るカク其所を網を
かぶせし取たる其持人の笠を尾花笠と
いふと哉

世一書

左 さむさむ

雪ふるこころをなまめ 世一書 秋暮

腰城浦福さむさむ

寺へゆくあふを握る 言ふ 菅乳

寒心の言をさむさむ 力なり 鳳郎

古蔓の杭をさむさむ 言ふ 廣徳

言ふさむさむ 言ふ 小島 里子

晴さむさむさむ 言ふ 言ふ 梅令

河沿へゆく 火守 打寒くぬ 茶静

一人之帳面也之字字可證 一茶
曾嘗此也之凡等寒加如 圓糖
竹心本也相之字也之字也 茗亭

右 冬 記

窓へ来り。雀跡も之冬も也 素心
雨二日控。生れ何れ冬も 由誓
春心也也。冬も也 月也

笠下へ清水も霞も之冬も也 景静
物更りも之冬も也 謝堂
竈馬も也。果も也。申也 鳳朗
探はれ也。骨打相也。冬も也 駟産
夜も情も人もの也。申也 士郎
表りの新着面白も也。冬も也 南溪
旅先也。甘も也。冬も也 西馬



右鳥

新なる海	街の音	音
かんと大空	なる鳥	心非
あやうに	あはれ	春
皆らみ	あはれ	醒
吹揺る	あはれ	文
下る	あはれ	八百

柳寺	あはれ	士朗
吹揺る	あはれ	岸
何所	あはれ	三



砂糖製法

駿州江尻在岩原村小絞車ロウロの數三四十軒も
有屋々夜ハツ時より初翌日九ツ時まで
掛りて牛小引するなるを十月半より十二月
中七十日程の宵一屋粗み甘蔗カニシヨ二百貫目絞
るを定とせり五十貫目海ハ牛に餅を飼
畑作休をさる又五十貫目絞るハ砂糖汁
五斗五升程出る絞車カ一カ一カ成り水カ
き時ハ甘蔗二三本一カにカりカ又絞るカ
りあり
まねみ西人居て甘蔗をカへカる人ハ



園のめく土を堆積の中み半身を出し
 働ハタくたり
 砂糖を製する人を別みあり右の候り
 水を大釜み入る製し揚アゲたり
 甘蔗を作るあり砂まりの地より濱風の吹
 不フたり
 又禮州紀呂も多り

廿二番

尾 巨 燧

手集る反し	燧が	多
おとあつれる	甘藷助	
出る用あり	再見	
冷い地	吟雲	
おふしの	田圃	
燧の燭	黄山	
りあつ用は	春静	

大山りくしきくむくひくひく 一瓢

母のいしきくの習

めくくしきくあくあく 積巨地部 茶静

右 蒲園

りきくくあくあくくあく 蒲園が 菓子

唐柑にあくあく思ふ 蒲園の 梅令

蒲園のあくあくくあく 蒲園が 正阿

暖くあくあくくあく ぬくぬく 祇白

眼のあくあく 蒲園のあくあく 宵探 風外

あくあくあくあくあくあく 我我 由藝

月影のあくあくあくあく 貸あくあく 冬映

音のあくあくあくあくあく 借あくあく 富梅

あくあくあくあくあくあく 蒲園のあくあく 梅令



熊取

奥州南部出羽ホにあり俗言^{ガクダ}母ま^ダげと云
者惣身手足と丸に熊の皮^{カク}少く包^ミ三人連
立^{カク}脊^{カク}不^{カク}亭^{カク}より作りある角^{カク}ゆる炭^{カク}俵^{カク}やう
の物を^{カク}不^{カク}厚^{カク}ふく其中へ果味^{カク}噌^{カク}棍^{カク}着^{カク}靴^{カク}ホ^{カク}成
入^{カク}り上^{カク}子^{カク}綴^{カク}を^{カク}の^{カク}せ^{カク}手に^{カク}五^{カク}尺^{カク}位の^{カク}箱^{カク}を^{カク}持^{カク}ち
雪中^{カク}深山^{カク}へ入^{カク}り幾^{カク}日も^{カク}居^{カク}りて^{カク}穴^{カク}熊^{カク}を^{カク}見
出^{カク}し招^{カク}引^{カク}出^{カク}し^{カク}突^{カク}笛^{カク}を^{カク}吹^{カク}く
又熊^{カク}の中^{カク}を^{カク}體^{カク}に^{カク}組^{カク}合^{カク}な^{カク}し^{カク}遊^{カク}心^{カク}程
と^{カク}き^{カク}所^{カク}あ^{カク}り^{カク}突^{カク}笛^{カク}を^{カク}と^{カク}し^{カク}此^{カク}獵^{カク}師^{カク}の
名^{カク}を^{カク}ま^{カク}げ^{カク}と^{カク}ふ^{カク}と^{カク}なり

廿四番

左 初雪

初^{カク}雪^{カク}れ^{カク}日^{カク}の^{カク}幸^{カク}や^{カク}用^{カク}も^{カク}な^{カク}く
嗜^{カク}む^{カク}を^{カク}思^{カク}は^{カク}川^{カク}雪^{カク}の^{カク}揚^{カク}り^{カク}茶^{カク}
起^{カク}出^{カク}る^{カク}物^{カク}手^{カク}に^{カク}付^{カク}あ^{カク}雪^{カク}水^{カク}乾^{カク}
初^{カク}雪^{カク}や^{カク}と^{カク}う^{カク}降^{カク}る^{カク}言^{カク}葉^{カク}の^{カク}子^{カク}
馬^{カク}打^{カク}の^{カク}音^{カク}造^{カク}心^{カク}の^{カク}ふ^{カク}雪^{カク}見^{カク}が^{カク}
露^{カク}泉^{カク} 亭^{カク}橋^{カク} 由^{カク}抄^{カク} 持^{カク}巻^{カク} 茶^{カク}静^{カク}

雪の中集り出さる雪見り
 花の機をまゝ申れみり
 徴され申す申し雪の年
 何れらん久かたに雪の人
 雪此人除く通し通し雪
 申す人なり雪の年
 初う降く申す人
 今雪の年雪吹く

白鷗
 暮三
 茶静
 浅美
 湖山
 鳳郎
 东芽
 西馬

宿の乃葉好く雪の年
 込あつて風は申す雪吹く
 酒々々々々々々々々々
 鳴る雪の年雪の年
 雪止る雪の年雪の年
 申す人なり雪の年
 雪の年雪の年雪の年
 中々の雪の年雪の年

貞山子
 八景
 多々
 湖山
 逸閑
 日人
 旭洲
 西馬

雪に音あふる夜明か雪は

茶静

右 由き

雪の門さるる高き明か

秋暮

静を我に抱えぬる小川の雪

尚山

一玉を心は茶の葉に禁や垣に雪

幻芝

進み出た雪に使徒の雪

一兆

不変るおむ小浅らぬ雪の宿

四人

雪の戸も出た所へなほ一玉を

乃彦

降止る小暗らぬ雪に宿

静心

沿り込めぬ由もや由もの家

縁助

打暎る雪も谷間に茶の音

一具

唯の雪の中を我を悦ばえぬ

茶静

雪のりも馬もく投る状も

葛三

在寺や天井張ぬ雪の音

道彦

雪場の火は焦らぬ由も茶

未葉

森の	火の	華の	雪の	花の	鳥の	雲の	霞の	霧の	雪の	花の	鳥の	雲の	霞の	霧の	雪の	花の	鳥の	雲の	霞の	霧の	
行	く	雪	の	響	の	響	の	響	の	響	の	響	の	響	の	響	の	響	の	響	の
何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の	何	の
積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る	積	る
た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た	た
と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と	と
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道

山をゆく人の雪の道
 梅令



火振

物のお帰を其の内に遠國を去りてん
とて山の上にて火振なり上方迄所々
あり大坂とて物品へ知れたる所信貴山
へ取笠置山へ移し又伊賀州布引山へ
とり夫より勢州青苔山へうつし是は津松
垣ホへ取て居る白赤木の櫛を推して居るを
遠目鏡トホ鏡メが子見るとなり夜ハ松明タテありて
とあり
解る丸の方へ六度右に七度前へ八度遠く九度振
時ハ采石有代銀六枚を以て分ち居ると知るなり

ふりてはるは持守り

と州の火振の事

丸度

世五番

尾 鉢 たる

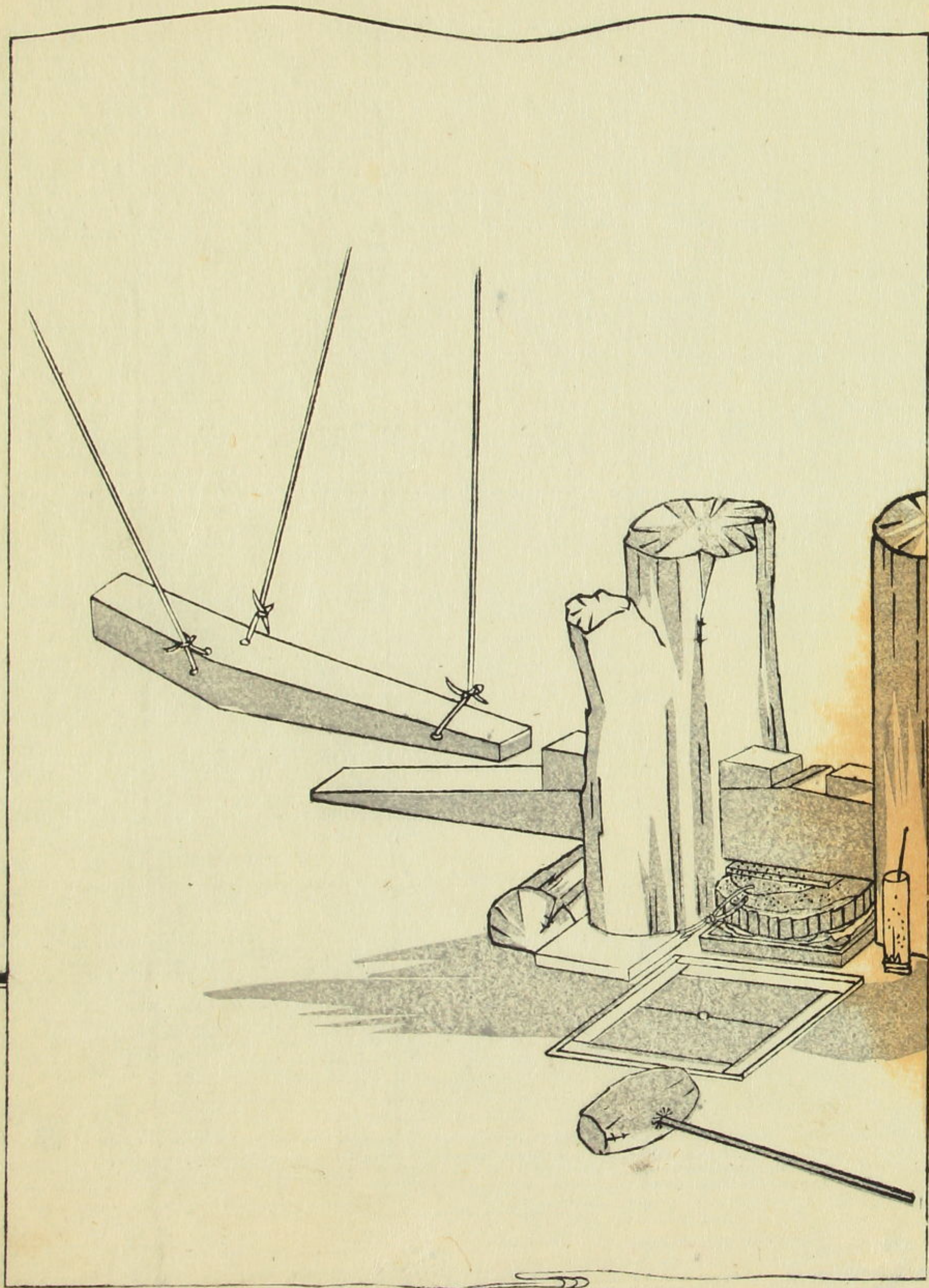
鉢叩ほくありあはる菩提あり 可成り
末の葉小建の音あり 鉢叩 葉山
何れかの初年に入れば鉢叩 梅令

待てぬ先もは 神多し
 念々
 出ぬも 止る 鉢叩
 礮中
 受ぬも 足し 茶
 茶牙
 月文と 物 何れも 一具

右 茶子

岩負う 茶子の 出立
 梅令
 何れも 後 茶子の
 風樓

茶子の 又 行く 元風
 元風
 茶子の 面 茶
 茶
 茶子の 足 拍子
 鳳石
 茶子の 茶 静
 茶静
 茶子の 茶 車 一具
 一具



油織木打

圃^ナにあり^タ葦^タ種^タを^イ蒔^クて^ハ後^ク幘^ク管^クの中へ
入^ルき^メ木^ヲを^ウ打^テ後^ニ取^ル葦^種一^石も^多ク
油^斗或^三針^とも^もこ^の釣^木振^の細^引め^を
杵^をつ^り垂^て打^又振^木打^ハ手^に杵^を振^サゲ
振^りな^ぐう^らめ^り口^の事^をさ^しめ^る
あ^ら一^と云^ふ

世六番

左 煤 拂

煤^掃に^濡る^事も^多し^月 花^川子
雪^も延^び雨^も多^し 拂^深も^多し
煤^の除^けを^孫に^教へ^る 茶^静
古^の物^や誰^の骨^打形^のも^多し 松^海
煤^掃や^湯の^汲も^多し 松^海
古^の掃^や芝^の上^に鳴^るも^多し 士^朗
古^の火^も多^し犬^の足^も多^し 拂^茶静
煤^も多^し笑^も多^し 富^梅

掃りぬ人の来りては菴の縁
 乙人
 煤掃や鶴おもむ向川岸
 青臺
 すわ湯のぬくまに一睡り
 五木
 こそ掃おるまゝに庭の心時を
 黄山

右 平 暮

遠まへて六段のあしを平暮り
 石泉
 秘へ入る蒼きもや年の梅
 幽峰

け年のこゝろや梅の心花き
 玄桂
 眠の念を年する春より乳
 葛三
 年れ暮る用もさし水ぬき
 茶静
 志の時の替る古にも古し歳の花
 一具
 年の暮る人のかたむか
 柳也
 年れ暮る火ふあはれと時
 茶静
 年情を暮れまゝ山か端
 花川子
 大晦日泣子ふらふ閑を
 西馬

大時、頼の、
年の屋の、
茶令

はら那支、
なひ、
葉、
秋乃、
名、
其道、

るをちねし市街にたむかひ
半耕の利得我何んぞ田家
手回りの精細辛苦を事
すも成りみ小知さ妻の類
須丘のいれ持保中ぬれ
目下遠く身にさかぬ事
あふれ親友茶静年とち

山林海濱の人々志のこ
何れもに多し秘をえり
何れも書も身持にたし
のみに書も身持にたし
のみに書も身持にたし
のみに書も身持にたし
のみに書も身持にたし
のみに書も身持にたし

之難ぬかと相いり努力を盡せり
と云ふことと云ふことと云ふこと
満ちあふ思ふは初學に
ありてははる程に狂詠を
之れ年の計算の如くは
来あるが如きことあり
終りおるは天の昔と云

天保七年の事なり
松原數十方の字を
之れは之れ多識の秘傳
名は之れ何事なるか
之れ松原の事なり
之れ松原の事なり
之れ松原の事なり
之れ松原の事なり

末行風雅之心を於て移す其好
た部与之此集の於て其岐に
阿波の李

天保十三年三月

坎富由誓以

葦齋正緒書

撰者	井上清七
筆者	松本葦齋
畫師	橋尚山
彫工	飯田源藏

江戸日本橋通四丁目

彌高處 書林 須原屋佐助



